

学びのたより

東海国語教育を学ぶ会

2017年7月1日

文責：JUN

鑄型にはめるのが教育ではない

1 ネコの写真家・岩合光昭さんの言葉

NHKのBSプレミアムに「世界ネコ歩き」という番組があります。我が家にも猫がいることもありよく見る番組です。この番組は、動物、中でも猫の写真家として国際的に有名な岩合光昭さんが世界のあちらこちらに行って猫に出会い、猫たちを写真に収めてくるというものです。

その岩合さんのことが、NHK総合テレビの「プロフェッショナル」という番組で取り上げられました。5月29日のことでした。

番組をみているうち、突然、岩合さんの、ある言葉が私の中に飛び込んできました。そして番組が終わるまでその岩合さんの言葉を噛みしめることとなりました。そこまで私が心ひかれたのは、岩合さんとネコのかかわりに感動したからというわけではありません。もちろんネコへの接し方、ネコに対する心の持ち方は、実際に猫と生活している私ですから感心させられることばかりでした。しかし、私が心揺さぶられたのは、岩合さんの言葉と行動に教師として学ばなければいけないことが存在していたからです。

ジャングルの動物を撮影することになったときのことです。岩合さんには出かける前の東京で考えていたことがあったのだそうです。それは、肉食動物が草食動物を獲物にして食し、草食動物は植物を食す、そして、肉食動物は死して土に還る、その土の栄養分で植物群が成長する、そういうジャングルの生きものたちの生きるすがたが表れる場面を撮りたいということだったということです。しかし、どれだけたっても思うような写真が撮れませんでした。

ある日、ジャングルの中で自動車が故障したのだそうです。なんとか走れるようにと修理するのだけれど、なかなかおらない、それで結局40分近い時間、その場にいることになったのだそうです。そのとき、岩合さんの目の前でキリンが木の葉を食べ始めたのです。背の高いキリンは、ある高木のかなり高い部分の葉を食べている、その葉にはかなり鋭利に尖ったトゲがあるのだけれど、キリンはそれを苦にすることなく食べています。キリンは口に入れた葉っぱをもぐもぐとすり潰すように食べています。自動車の故障で何もできなくなっていた岩合さんは、その時はただそういうキリンの様子を眺めているしかなかったのでしょうか。ところが、そのなんでもないキリンの動きが岩合さんに大きな気づきをもたらしたのです。それは、自分が撮らなければいけないのは、東京で考えていたようなことではなく、こういう平凡な日常の営みなのだ、そこにこそ動物たちの生きる本当の姿があるのだという気づきでした。

岩合さんは、ネコと心持ちが合ってくると、ネコの考えや次の動作までわかってくと話されまし

た。そのことを岩合さんは、ネコとともに揺れている、つまりネコと「共振する」という言い方で表現されました。テレビを観ていた私は、この「相手と共振する」という言葉にこそ、動物と向き合う岩合さんの流儀が表れていると思いました。そして、この流儀は、あの麒麟との出会いが契機となって生まれてきたものにちがいないと思いました。テレビ番組を思い出しながら綴っているので、ここに私が書いていることには微妙なとらえ違いがあるかもしれません。それはどうかご容赦ください。

2 子どもと共振する教師に

岩合さんの言葉と行動に、教師として学ばなければいけないことが存在していたと言いました。その最たるものは、「相手と共振する」ということです。教師にとって相手は子どもです。つまり、教師は子どもと共振しなければならない存在なのです。そう思ったとき、私は自然と、自分は子どもと「共振」していただろうか、子どもとともに揺れる教師になっていただろうか、そう考え始めていました。

子どもとの共振のあり様にこうでなければいけないというものはないでしょう。子どもによって、状況によって、共振の在り方はさまざまになるにちがいません。もちろん、どこまでのことができれば共振していると言えるのかと問われても答えることはできないでしょう。ここまでという終わりを区切ることはできないからです。大切なのは、一人ひとりの子どもをよく観て、子どもの言葉をよく聴いて、子どもの状況をよく感じ取って、その子どもと共振する方向を向いていることです。精一杯子どものことに心を砕いていることです。

しかし、子どもと共振するということは言葉ほど簡単なことではありません。ましてや子どもは何人もいるのです。何人もの子どもの一人ひとりについて、刻々と変わる子どもの状況をとらえ、その一人ひとりと「共振する」ということが完璧にできるわけがありません。だから私は、子どもと共振する教師になろうとしていること、精いっぱい一人ひとりの子どものことに心を砕いていることが大切なのだと思うのです。完璧にしなければと考えるのではなく、いつもその方向を持ち続けて心を砕き実践している、それが大切だと思うのです。

それには、教師は、子どものことをみようとしていなければなりません。何をどう考えればよいかわからなくなっている子ども、考え違いをしている子ども、授業をしながらそういう子どものことをみようとしていなければなりません。そういう子どものことに心を砕いていなければなりません。

予期しない子どもの考えに潜む素晴らしさ、魅力的な子どもの考えのつながり、わからなさ、間違いの向こうの学びのゆくえ、そういったものもみようとしていなければなりません。みようとしていない教師は、子どもの学びを子どもの考えに沿って深めることができません。

体調を崩している子どものしんどさ、友だち関係における悩み、家庭生活における鬱積した気持ち、そういう子どもの心の動きについても少しでも気づいてできる限り斟酌しなければなりません。その重い気持ちに寄り添ってやらなければいけないし、できることがあれば行わなければなりません。

子どもと「共振する」には、まず「みえる」ことです。それは、「いつもみようとしている」教師にしかできないことです。みえれば、心が動きます。心が動けば、何をしなければいけないか、教師である自分に何ができるのか、そう考えることができるでしょう。

子どもの心は常に振れています、揺れています。その「振れ」「揺れ」をみようとする教師になり

たいものです。そこから「ともに振れる」「ともに揺れる」という子どもへの寄り添い方が自然と生まれてくると思うからです。

3 鑄型にはめるのが教育ではない

教師に授業研究は必須です。教師の主たる仕事は授業ですから、その授業をよりよくするための授業研究を怠ってはなりません。とは言っても、自分で自分の授業を参観することはできません。仮にそれができたとしても、自分の授業の良さや改善点を自分だけで見つけて改善していくことは難しいでしょう。ですから、自分の成長にかかわってくれるだれかが必要なのです。教師の授業研究に限らず、ひとがひととして成長するとき、他者から批評を受けること、助言を得ることは必須だからです。そういうことから、学校では、互いの授業を参観して学び合う「校内研修」「現職教育」が行われているのです。

「学びの共同体」の学校においては、授業前に行う研修会よりも、授業の後で行う事後の研究会のほうを大切にしています。つまり、参観した授業について検討する「振り返り」こそ、教師の専門性を高めると考えているからです。もちろん、授業前に行う研究をないがしろにしているわけではありません。教材に対する見識を高めずして子どもの豊かな学びは生み出せません。ただ、授業前に作成するプランが融通の利かない型にはまったものになると、授業がその型にはめ込むことになる危険性があります。そうすると、授業の場において「子どもと共振する」どころか、子どもを教師のプランに無理やり引きずり込むことになります。

前述したように、互いの授業を参観して学び合う「校内研修」「現職教育」は重要です。しかし、そこには留意しないといけないことがいくつもあります。その一つが、授業前の取り組みの在り方なのです。

私に教室があったころ、つまり 30 年ほど前のことですが、多くの学校で「指導案検討」という協議の場がもたれていました。研究授業をする教師の学習指導案を何人もの同僚で検討する会議です。こういう場がもたれるのは、研究授業をする教師にとって心強いことですが、このことがかえってよくない結果をもたらすことがあります。授業は、その授業を行う特定の教師が、その教室に集う特定の子どもの対象として行う、いわば共同作業です。そのとき子どもと教師の「共振」が生まれたらそれはきっと素敵な授業になるでしょう。ところが、指導案検討会で協議するすべての教師がこのことを熟知していないことがあるのです。そして、「自分だったらこうする」という持論をぶつことになります。そういう、教師が寄ってたかって（誇張した言い方で失礼になるかもしれないけれど）作り上げた学習指導案は、果たして授業をする教師のものと言えるのでしょうか。こうして、実際の授業が指導案通りだと思うあまり強引な進め方になり、子どもの学ぶ意欲を削いでしまった、子どもを混乱させてしまったといったことがいくつも起こったのではないのでしょうか。

先行授業なる授業を本番の研究授業の前に実施している学校もあります。同じ学年の別の学級で、その日までたてた学習指導案でやってみるという取り組みです。実際に子どもにあててみなければ、子どもがどういうふうになるかわからないということで行われていることです。その考え方は理解できます。子どもの反応を大切にしようとしているからです。ただ、このやり方にも落とし穴があります。反応はどの学級も同じになるわけではないのです。子どもによって、学級によって微妙な異なり

が生まれる、それが授業なのです。そのことをしっかり認識しないで、先行授業で子どもはこう反応したからと思い込んで本番に臨むと、思いもかけない子どもの反応に対応できなくなります。

学ぶのは子どもです。何人もの子どもです。授業はシナリオ通りに行う「劇」ではありません。授業のそのときに、子どもが思考し、活動し、探究し、気づき、深めていくものです。授業は、その時間、その場所において生まれる即興的・創造的なものなのです。

もちろん、長年にわたり蓄積された学問の結果をもとに、長年にわたり行われてきた実践結果に基づいて学習指導案を作成するのですから、授業の結果が学習指導案とまるで異なるものになるわけではありません。もしそうなったら、それは教師の研究不足、認識不足、準備不足でしょう。けれども、どれだけ周到に研究してきても、隙のないプランを立てていても、その通りにならない、それは教師ならだれもが日常的に感じていることです。事実、いい意味でもよくない意味でもいつも予測不能です。どんなときにどういう状態が生まれるかわからないのです。それは、学びは、その場所にいる人間が、その時間に生み出すものだからです。

授業は、特定の教師が、特定の子どもを対象に、特定の教材を使って、その場と時間で生まれる状況に応じて、教師と子どもが共振して創りあげる創造的なものでなければいけません。決して、事前に作成したプランにはめ込むものであってはならないのです。鋳型にはめ込むようなものにならないのです。だから、創造的なものにしないような事前の指導案検討は慎むべきなのです。

では、事前にやっておくべきこととはどういうことなのでしょう。

やらなければいけないのは、教科の本質とつなげる教材研究です。それはどれだけやっても終わりのないほどの奥深いものです。だから、周りの教師たちと学び合う協議はおおいにやるべきです。自分一人ではどれだけ研究を積んでも限度があるからです。教材に対する見識を深めるのに教師間の協議・学び合いは大切なことにちがいありません。

しかし、どう授業するかは自分でしか決められないことなのです。もちろん、信頼する同僚に自ら尋ねるのはいいのです。けれども、どう授業するか最終的な決定は授業者本人が行うことです。決して、何人もの教師の話し合いで作上げたものや、リーダー的な教師の考えで作られた指導案にはめ込むような授業にしないことです。

教師になんとしても必要なものは、教材への専門的見識、そして、子どもをみる目、子どもをとらえる感性、子どものことに心を砕く人間性です。これらがしっかりと組み合わせることで、子どもによる深い学びが実現します。どれだけ教材についての知識が豊富であっても、子どもの状況をとらえない鋳型にはめ込むようなやり方をしていたら、それは教育ではないのです。目の前の子どもの事実感動する心をもたないで、子どものことに心を痛めたりともに喜びあったりできなくて、子どもの教育はできないのです。子どもたちを豊かにしていくことはできないのです。

岩合さんがキリンから学んだことは、目の前の事実にもっとも大切なことがあるということだったのではないのでしょうか。授業も全く同じです。目の前の子どもの事実が何よりも大切なのです。だから、教師は、どこまでも、子どもの事実が「みえる」教師を目指さなければならないのです。授業前よりも授業後の研究を大切にするのは、その事実の見え方を磨くことができるからです。子どもと共振できる教師になることができるからです。子どもの事実、学びの事実をないがしろにするような鋳型をつくったり、その鋳型にはめ込むような授業をしたりしてはならないのです。